

22PO-am383

必須問題の学習到達度と薬剤師国家試験成績との相関 (第2報)

○中島りり子¹, 井上信宏¹, 山内理恵¹, 大野修司¹, 久保元¹, 浅井和範¹ (1星薬大・薬学教育研究部門)

【目的】 薬剤師国家試験は、必須問題、理論問題及び実践問題から構成されている。特に必須問題は薬学の基礎的な知識が問われ、厚生労働省の合格基準では正答率70%の足切りラインが設定されており、合格のために高得点が要求される。本学の学生について、4年次のCBT模擬試験等必須問題に相当する問題及び5年、6年次の国家試験対策模擬試験の必須問題ならびに卒業試験の必須問題の得点率に着目し、薬剤師国家試験との関連性について検討した結果を昨年度の本学会大会(金沢)にて発表した。そこで今回は、さらにデータを追加することで本結果の再検証を行うことを目的とした。

【方法】 平成27年度から平成30年度の薬学科6年生を、卒業延期生、国家試験不合格者、国家試験合格者の3群に分け、CBT対策模擬試験及び国家試験対策模擬試験ならびに本学の卒業試験等の結果から、各群の必須問題及びそれに相当する問題の得点率の変遷を比較した。

【結果・考察】 平成27年度から平成29年度までの試験成績をもとに検証した結果、必須問題の平均正答率は、6年次9月の段階で国家試験合格者とそれ以外の学生との間で既に大きな差が生じており、模試毎の難易度差による多少のばらつきは存在するが、6年次9月以降の必須問題の平均正答率に大きな変動は認められなかった。また、4年次のCBT対策模擬試験の得点率が高い学生は薬剤師国家試験の合格率が高く、薬剤師国家試験の理論問題、実践問題で確実に正答を選択するためには必須問題の知識が必要不可欠で、薬剤師国家試験合格の為には基礎的な知識の早期定着が必須であることが示された。本発表では、さらに平成30年度の試験結果を追加して報告する。